



小中高・教育関係者の

授業プログラム立案に役立つ

アイデア集



京都府社会福祉協議会では昭和55年から学童・生徒のボランティア推進事業（福祉協力校）の取り組みを始め、市町村社協や学校等と連携しながら、これまで多様な切り口で福祉教育を推進してきました。平成24年度からは「社会的包摂に向けた福祉教育」をテーマに、社会的孤立や排除を減らし、誰もが社会参加ができる地域づくりを進めるために、福祉教育の視点からアプローチを行う研究会を開催してきました。これらの取り組みの蓄積を踏まえ、令和5年度より福祉教育実践を充実していくための福祉教育プログラム作りに取り組みました。

学校や地域の団体が連携して福祉体験学習を行う中で、子どもたちが福祉に関心を持つきっかけを作り、その体験を通じて「共に生きる社会」に思いをはせてもらえることを期待します。

本会として、福祉教育を通じて、誰もが役割を持ち認められながら自分らしく地域で暮らす「地域共生社会」の実現に向けて、つながり学びあう活動参加を今後とも進めてまいります。

[挨拶]
未来を創る福祉教育のために 小林 洋司 3

身近な福祉の課題を解決するために、
学校ができることとは？ 4

福祉教育のプログラム作成に係る
ポイントについて考える 小林 洋司 6

[多世代交流のプログラム事例] 8

[当事者のプログラム事例] 12

府内社協の取組事例 14

[学校の事例] 京田辺市、八幡市、南丹市 14

[当事者の事例] 八幡市 24

[多世代交流の事例] 福知山市、長岡京市、南山城村 26

未来を創る 福祉教育のために

小林 洋司（日本福祉大学）

この度、2024年度の1年間の京都府内における福祉教育の取り組みをまとめる冊子を編ませていただきました。京都府の市町村で実施された数多の実践にこうした機会に出会わせていただき、私自身心より感謝申し上げますとともに、深い学びの機会になっています。

いうまでもなく、社会福祉協議会は地域福祉の核となる組織であり、多様性の尊重や、地域共生社会の実現に際して今日その働きが一層期待されていると思います。そのなかで、ふくしのイメージをつくったり、上書きしたりしていく「学びの機会」を興味深く、身近にしていけることは非常に重要なことです。

私も障害福祉、地域福祉、高齢者福祉あらゆる領域を「教育・学習論」で横断的に活動をしています。しかし、「教育・学習」なるものはすぐに結果が出るものばかりでなく、「教育・学習」に割く時間や、取り組む意義については常に問い直されているのも事実です。

今回、本講座の講師をともにつとめたメインストリーム協会の鍛冶克哉さんや、4回目のプログラムに参加させていただいた私のゼミの学生たちにも力を借りて作成したこの冊子を手に取っていただき、ご一読ください。そして、この冊子の実践の中でふくしを学んだ学習者のことをぜひ想像してください。そしてその学習者が、大きく深い学びを得て生きていくことをイメージしてください。「学びの場を創る」ということは、今イメージしていただいている人たちの表情がどうなっているか、その人たちがどのように生きていっているかに期待と希望を寄せて継続していくものであるはずです。

身近な福祉の課題を解決するために、

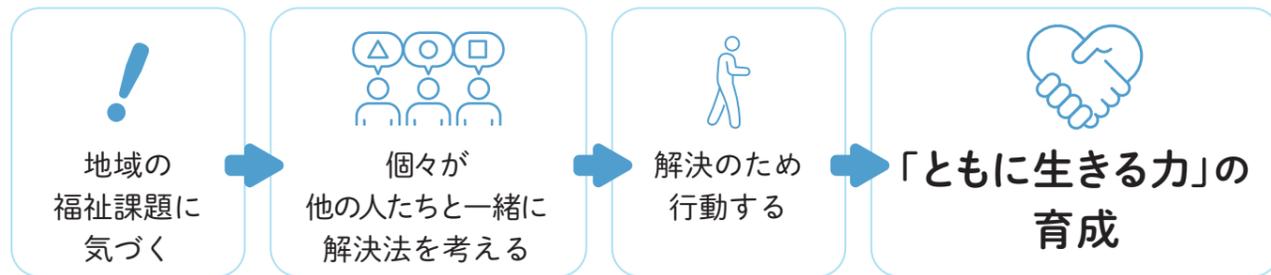
学校ができることは？



福祉教育ってなに？

「周囲の人たちや地域との関わりを通して、どのような福祉課題があるかに気づき、課題を解決する方法を考え、解決のために行動する力を養うことで、『ともに生きる力』を身につける取り組み」です。

※福祉課題：だれもがかけがえのない存在として尊ばれ、差別や排除なく、安心して気持ちよく生きていく事を妨げるもの



茨城県社会福祉協議会 (2025)
「福祉教育ってどんなこと？」引用

福祉教育を進めていくために共有したい役割



全国社会福祉協議会 (2014)
「福祉教育実践ガイド」抜粋・一部加工

学校でできる福祉教育

体験学習

- ・ 障害者体験 (車いす、アイマスク、手話・点字)
- ・ 高齢者疑似体験
- ・ ボランティア体験



まちづくり学習

- ・ 身近な生活課題や福祉問題を取り上げる
- ・ その解決方法を考える
- ・ 地域の人たちと一緒に行動する



ふれあい学習

- ・ 施設訪問
- ・ 居住地交流
- ・ 障害のある人やお年寄りの話を聞く (生活を知る)



茨城県社会福祉協議会 (2025)
「福祉教育ってどんなこと？」引用

プロセス

1. ねらいの設定
2. 事前学習 (気づく・考える)
3. 体験・行動
4. 振り返り (新たな気づきや学びの共有)

目指すもの 学びの深化 豊かな福祉観の醸成



体験は「しあわせづくり」のきっかけ。体験しておしまい！とならないように。

福祉教育のプログラム作成に係る ポイントについて考える

小林 洋司

そもそも福祉教育について

福祉教育の定義

「憲法 13 条、25 条等に規定された人権を前提にして成り立つ平和と民主主義社会を作り上げるために、歴史的にも、社会的にも疎外されてきた社会福祉問題を素材として学習することであり、それらとの切り結びを通して社会福祉制度、活動への関心と理解をすすめる、自らの人間形成を図りつつ社会福祉サービスを受給している人々を、社会から、地域から疎外することなく、共に手をたずさえて豊かに生きていく力、社会福祉問題を解決する実践力を身につけることを目的に行われる意図的な活動」

(全社協・全国ボランティア活動振興センター「学校外における福祉教育のあり方と推進」1983)

私の解釈

福祉教育は、人と人がつながるきっかけ

人がしあわせを実現するうえで大切な学び

人が人を尊重するための学び

人が生きる / 生活するうえで大切な学び

だと思っています。

福祉教育では、**規範ではなく価値を考えることを大切にすること**を前提に考えます。

福祉教育をどう創るか？

福祉教育の概念は、多岐にわたる学びを表現する言葉

学校での福祉教育 地域での福祉教育 福祉教育の範囲にとどまらない福祉教育……

とりわけ、社会福祉協議会は「地域福祉の推進を図ることを目的とする団体」です。

つまり、地域づくりにおける役割は、福祉教育も社会福祉協議会も住民の価値観に働きかけつつ“地域を育む”ことであるといえます。つまり、福祉教育を大事にすること≡社協ならではの地域福祉を実質化する鍵^{カギ}と考えることができます。

※地域福祉…それぞれの地域において人々が安心して暮らせるよう、地域住民や公私の社会福祉関係者がお互いに協力して、地域社会の福祉課題の解決に取り組むこと。

現代社会の風潮

タイパ、コスパに代表されるようにその事業や学びに取り組んで「意味がある」「結果がわかりやすい」ものが評価され、プログラム化されていく。企画者にとっても学習者にとっても評価がしやすく、手軽なプログラムは、わかりやすい。しかしややもすると、障害の擬似体験や、支援の知識・技能の習得、施設訪問という方法は、人々の価値観に影響を与えるものになっていくようになってしまいます。

福祉教育プログラム作成(創造)のポイント

福祉教育のテーマは「日常」の中にある

これまで福祉教育は、社会福祉問題(高齢や障害など)をテーマとして取り上げることが多くなされてきました。しかし、今日、しあわせの実現に関わっては、高齢の人や障害のある人のことだけを学ぶのが福祉教育ではないと考えられるようになってきました。福祉教育のテーマは、特定の誰かではなく、わたしであり、あなたが生活するその中にあると考えてみると、学びのタネをたくさん見つけられるかもしれません。

学校との関係づくり

福祉教育を実践する場合、学校や地域との連携は大切です。しかし、もともと異なる目的や異なる時間感覚で動いている組織や人がつながるのは骨が折れることです。だからこそ、「連携」は大切に、学校でなければできないこと、地域でなければできないことが混ざり合っていく場や時間がたくさん作られる必要があります。

学び合いの場づくり

福祉教育は、学校教育とは異なる「ものさし」でできごとや人を捉えることを可能にする視点を持っています。例えば、学校の授業で活躍できない子どもが活躍できる。地域に飛び出しているいろいろなぜ？に出会う。そうした異なる「ものさし」の場では、知っている人/知らない人、できる人/できない人にとらわれない学び合いが期待できます。

伝える工夫を面白がって考える

福祉教育のプログラムを考えることは、日常的な業務の中で時間がかかってしまうため、後回しになってしまうこともあるかもしれません。しかし、先に書いたように福祉教育を大事にすること≡社協ならではの地域福祉を実質化する鍵^{カギ}と考えれば、その時間が大切という考え方もできます。ぜひ、子どもたちや地域住民にどのように語りかければメッセージが伝わりやすいのか面白がって考えてみてください。他に悩んでいたことがらも併せて動き出すかもしれません。

今、そしてこれからの福祉教育

福祉教育・ボランティア学習の考え方に基づく実践と検証

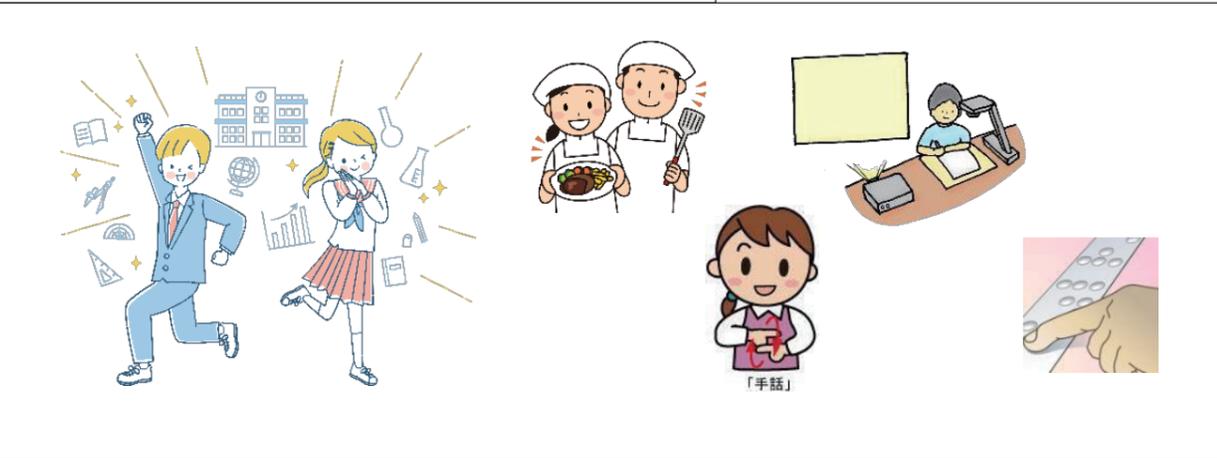
→福祉教育とボランティア学習という考え方

「確立された福祉制度・地域福祉システムのなかで、それを円滑に運用し、再生産していくための主体形成論に矮小化されがちな福祉教育論」と、ボランティアズムに根ざし、「制度にとらわれない無限定さ、批判性」に新たな気づき、福祉や教育のパラダイムシフトをおこす可能性をもつボランティア学習という概念が拮抗しながら、互いに、相補的な関係、相乗的なありようを目指す概念(諏訪 2006)

福祉教育とボランティアが関わる意味を考え、実践に活かす。

【参考文献】全社協・全国ボランティア活動振興センター「学校外における福祉教育のあり方と推進」1983
諏訪徹「福祉教育とボランティア学習の「・」(ナカグロ)」日本福祉教育・ボランティア学習学会 学会ニュース No.30 (2006. 6. 1) 2006

やってみよう！聴いてみよう！サマボラスクール



実施日	場所
夏休みの2日間	〇〇市アリーナ 〇〇市保健福祉センター
参加者	依頼先
中学生、高校生	市内の中学校、高等学校、朗読ボランティア、手話サークル、要約筆記サークル、〇〇市保健推進課、障害者支援課

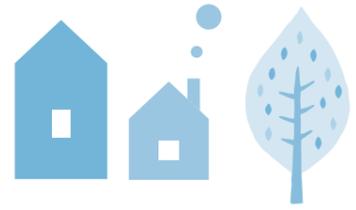
内容
<p>《1日目》</p> <ul style="list-style-type: none"> 〇〇市ボランティア総合センターの登録団体による活動紹介と体験(点字、朗読、手話、要約筆記) 障害と地域社会について <p>《2日目》</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日目のふりかえり みんなでクッキング(介護食を作って試食) こころの健康についてのお話

ねらい・目的
<ul style="list-style-type: none"> 障害についての理解を深め、理解者を増やす 私たちがすむまちで、人を安心して生活するために、自分にできることを考える 障害について関心と助け合い、思いやりの気持ちを育む 精神疾患はだれにでもかかる可能性がある病気であることを理解する きっかけづくり、学びの場

実施後の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動者の啓発 障害、障害者支援の理解が深まった やさしいまちづくり きっかけづくり プログラムの組み立て方

講師の声

2日間で普段できない色々なことの実験ができる企画は良いことだと思いました。障害当事者と一緒に学び、対話する中でしか学べないこともあると思うので障害当事者を交えたプログラムになることによってさらに良いプログラムになると思うし、そのあたりを期待したいところです。



メインストリーム協会 鍛冶 克哉

他の参加者(社協)より

社協職員①

「やさしいまちづくり」というキーワード、とても共感します。その実現のために他者を知り、また自分も知る機会を設けること、ぜひ参考にしたいです。



社協職員②

サマボラスクールを企画するときに、ゆったりとした雰囲気の中で、参加者の皆さんが社協や施設職員、ご利用者の方々と関わりつながれる学びの機会をつくることを意識することが重要だと感じました。また、精神疾患についてもアプローチできることも大切な観点だと感じました。

識者よりひと言



中学生、高校生に向けてのプログラムは、参加者への情報発信が重要だと思う！忙しい中高生に届くよう地域の多くの方が関わって企画されている印象をもつ。実際に参加した中高生が何をみて、どう考えたのか、どのように時間を使っていきたいと思うようになったのかなどゆっくり話をしてみたい。

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

ENJOY FES ※〇〇には地域名を入れます



〇〇オータムフェスタ



〇〇オリンピック

実施日	場所
夏終わりの休日	〇〇市エアリーナ
参加者	依頼先
すべての人たち	市内の小中高、福祉施設、視覚障害者協会、聴言センター、防災士会、ボランティア団体、各企業など…

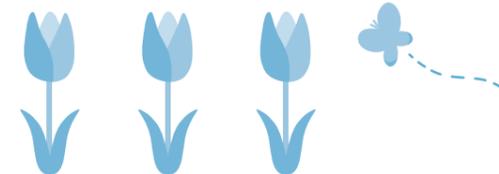
内容
<p>①お祭り+福祉体験 通常のお祭りに加えて、福祉の体験ブース（車椅子、アイマスク体験、難聴体験、防災など）の設置。どれだけ体験するかに応じて、特典がもらえる。⇒福祉体験を促す。 →参加する子供だけでなく、保護者にも興味を持ってもらう。（親子でガイドヘルプ体験など）</p> <p>②誰しものが活躍できる場の提供 高齢者の方や、障害者、若者などのパフォーマンスの場の提供。（バンド、ダンスなど） また、これらの人たちのコラボステージの提供（高齢者のボランティアさんが演奏する楽器に合わせ学生が歌うなど。）</p> <p>③お互いがお互いを必要としている場の提供 若者から高齢者へ スマホ教室のブース、SNSの面白さの発信 高齢者から若者へ 昔遊びの伝授、戦争のお話</p>

ねらい・目的
障害がある人もない人も、高齢の方から若者まで、すべての人たちが参加し、楽しみ学べるフェスを開催。各々、自分のポテンシャルが発揮できることをし、自己の必要性を再認識してもらう。

実施後の成果と課題
学校での福祉教育では、児童止まりだった成果を今回のイベントでは、保護者にまで理解してもらえた。大規模なイベントのため、賛同してくれる人たちが構成される実行委員会が必要。どれだけの人が、同じ思いで企画・運営をしてくださるか課題。

講師の声

障害や年齢に関係なくて色々な人が参加できるようになっているのはインクルーシブな社会の視点からもとても重要だと思いました。その一方で、『健常者』が『当事者と触れ合う』という認識のままだと健常者からみて『自分とは違う存在』という考えのままになってしまうのではないかと思います。



メインストリーム協会 鍛冶 克哉

他の参加者(社協)より

社協職員①

お祭りの中に体験ブース！「大変そう」「助けてあげたい」だけでなくお互いのできることを感じあえそうです！



社協職員②

お互いがお互いを必要としている場の提供は、「若者だから」「高齢者だから」「自分だから」役に立てるといふ喜びにもつながると感じました。コラボステージでは、「する」「してもらおう」という双方向のやりとりではなく、同じ目的に向けて共につくるという取組は、今後の事業にも参考にしていきたいと思います。

識者よりひと言



地域に暮らすすべての人々に向けた福祉教育プログラム。学校をベースに実施させる福祉教育が地域、子どもの先にいる保護者にまで広がる魅力的な機会！企画書にもあるように、規模が大きくなればなるほど「ココロザシ」を共有するのが難しいのだろうな—ということが想像される。ココロザシの共有を図ろうとした関係者の方の学びも聞いてみたい！

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

自然につながる



実施日	場所
夏休み期間（7日間）	支援学校・季節療育事業
参加者	依頼先
小学生	支援学校等

内容
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 障害（特性・社会的障壁）を知る・理解する…例えば、支援学校の先生から（1日目） ⇒どんな地域にしていきたいか、自分には何ができるか、どんな自分になりたいかを問う …………… 同じ体験をする、協働作業にとりくむ（5日目程度）…………… ✓ 一緒に学ぶ…例えば、同じテーマで何かを学ぶ（支援をする立場からの脱却） ✓ 一緒に考える…例えば、支援学校の体育祭に参画（体育祭プログラムの企画検討等） ✓ 一緒に遊ぶ…例えば、スポーツ、レジャー等（自然にサポート、楽しい時間を共有する） ✓ 一緒に食べる…例えば、一緒に調理し、一緒に食べる／共食（お疲れさん会等） …………… 振り返り（6日目）…………… ✓ 自分のビフォーとアフターを検証する 自分が、みんなが、住み続けられる街にするために、自分からできることを考える。

ねらい・目的
<ul style="list-style-type: none"> ・支援学校・普通学校のセパレート教育 ・そのため障害のある人を「特別」な存在として捉えてしまう。 ⇒「特別」を「普通・自然」の行動につなげる。 ⇒サポート＝自然なコミュニケーションとして身に付ける。 <p>自分は支援側だけの立場ではなく、同じ時間を生きていく共同体として、多様な人と関わり共に生きていく力をつける。</p>

実施後の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ・同じ地域に住んでいても、関わり合えない同じ年代の友達がいることが分かった。 ・別々でなく、一緒に学校生活を過ごしたい。 ・何気ないサポート・コミュニケーションを通じて、自分の行動力・可能性を広げることができた。 ・一緒に考えて、工夫をすることで、遊ぶことや、スポーツをして楽しい時間を一緒に過ごせた。 ・大人になっても、みんなが地域で幸せに過ごせるためには、何ができるか考えてみたい。

参加者の声

同じ地域に住んでいるはずなのに、同じ地域の学校に通えていない子供達がいることに気づけることは、参加した小学生にとってはとても良いことで大きな学びになると思います。

メインストリーム協会 鍛冶 克哉



他の参加者（社協）より

社協職員①

自分が、みんなが、住み続けられる街にするために、自分からできることを考える」という、自分を主体とした福祉教育の取り組みが素晴らしいです。「一緒に」学び、考え、遊び、食べることで大切ですし、当会の福祉教育推進の参考にしたいと思います。

社協職員②

インクルーシブ教育の体験・また実現を目指す実践であり、現在ある課題にアプローチする実践であることがとても良いと思いました。学ぶ・考える・遊ぶ・食べる…と子どもたちが共に過ごす時間が自然な時間になるように工夫されていて、とても良いと思います。

識者よりひと言



7日間にわたって特別支援学校の生徒と関わるプログラム。「分けられている」ために知り合えない状況に注目し、テーマにあるように「自然に」つながることを目指しているのはものすごく重要！分けられている学校に通う小学生の感想を仕組みの側に反映させる大人の仕事が次のポイント！

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

府内社協の取組事例

京田辺市 学校の事例

福祉学習(車いす体験)



実施日	令和6年11月12日(火)	場所	京田辺市立松井ヶ丘小学校
参加者	5年生	依頼先	医療法人社団 石鎚会 京都田辺中央病院

内容
①導入 自己紹介
②車いすの説明や手順、体験の説明 *正しい車いすの操作について学ぶ
③体験(3~4各1組) *声かけ、車いすの扱い方、段差や坂道の操作を学ぶ
④振り返り 感想や気づきを発表する *車いすを押してみても気づいたこと、乗ってみて感じたことなどを発表する

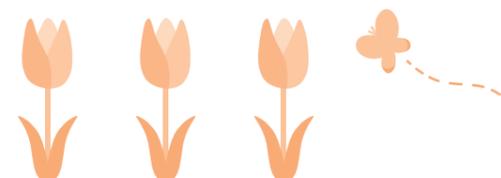
ねらい・目的
*車いすを押す役、乗る役、ヘルプ役を交代することで、自分たちの周りにはあるバリアに気づき、正しい車いすの介助方法や、介助する人、介助される人の気持ちを理解する機会とする。
*車いすを利用する方の日常生活について考え、誰もが「暮らしやすい」とはどういうことを考える機会とする。

実施後の成果と課題
*45分授業の体験なので、“車いすの介助”を中心に学習をしたが、段差を超える時の操作が怖いと感じる生徒が多いように感じた。
*自走用の車いすで校内を回るなど、一人で操作することの大変さを知ることでも大事だと思う。

「福祉教育ワークショップ」講師の視点

いわゆる健常者が車いすに乗る、車いすを押すという経験は非常に大切だと思います。何気なく生活していた街が、実はとてもバリアフルだったことに気づくことは子供たちにとって大きな学びになったのではないかと思います。

メインストリーム協会 鍛冶 克哉



他の参加者(社協)より

社協職員①

車いすの介助を通して、自分ではない他者の気持ちを理解するきっかけを作ること、それはその先に多様な他者への理解につながるきっかけにもつながっていく貴重なきっかけとなっていていいなと感じました。



社協職員②

ペアで車いすの体験を行うことで介助する・されるそれぞれの立場で思いや気持ちを共有しながら、日々の暮らしが当たり前ではないことを再確認できるきっかけの場になると感じました。



識者より一言



車いすの体験学習は、オーソドックスだが色々な気づきがある。その気づきを教員をはじめとした授業企画者がどう拾えるかがカギ!! 企画書にある「車いすを利用する方の日常生活」に想いを馳せられるように工夫を重ねていきたい!!

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

福祉理解教育(南山小学校六年)



地域の高齢者の自宅を訪問している様子

訪問後のふりかえり

民生委員さんの前で発表する際の報告書

地域にはどんな人がいるのか、調べた内容をグループに分かれて発表

実施日	場所
1学期から3学期にかけて	南山小学校、地域の高齢者の自宅訪問
参加者	依頼先
南山小学校六年生、八幡南地区民生委員、地区内の高齢者	八幡南地区民生委員、地区内の高齢者

内容

南山小学校では、3～5年生まで様々な「障がい」をテーマに福祉理解教育を実施されており、6年生の授業では、「まとめ」と「地域」という視点で福祉理解教育をすすめていきたい、また、併せて高齢者との交流も考えたいとのことで学校から協力の依頼があった。

【1学期】地域にはどんな人がいるのか、高齢者、障がい者、子ども、犯罪者などそれぞれが調べたいと思った事柄について、インターネットで調べ、その内容をグループに分かれて民生委員の皆さんの前で発表した。

【2学期】民生委員の活動の様子を劇で見せ、民生委員の役割、地域を訪問するうえで気をつけなければいけないことについてグループで話し合った。また、こども民生委員として地域の高齢者の自宅を訪問し、好きなことや苦手なこと、最近していることなどを聞き取った。訪問後は、グループに分かれてふりかえりを行い全体で共有した。

【3学期】訪問を通して高齢者から聞き取った内容をもとに、高齢者を招いて交流できるようなイベント(福祉の集い)を企画し、開催する。

ねらい・目的

【学校】

- 自分の地域の高齢者との繋がりを感じ、地域から包まれている感覚を体験させる。

【社協】

- 授業を通して「高齢者だから助ける」ではなく、顔がわかり、互いに声をかけあい、助け合える地域づくりを目指す。
- 校区内には多世代の関わりが少ないため、民生児童委員の活動を知り、民生児童委員が日頃関わっている高齢者との交流から地域への理解を深める。

実施後の成果と課題

【成果】

- 地域への興味を持ってもらうことができた。
- 民生児童委員と地域内の顔見知りになり、授業外で交流した話を聞くことができた。

【課題】

- 一年間を通して、継続的な福祉教育の場を設けることが難しい。
- プログラムに関わる団体同士(学校、民生児童委員)が対等に話せるような環境が求められる。
- 先生向けの福祉教育について考える機会が必要。

「福祉教育ワークショップ」参加者の声

民生委員をきっかけとして地域を知っていく福祉教育は面白いと思いました。また、高齢者、障がい者、児童、犯罪者という幅広い視点を学習することは大きなことだと感じました。この視点で学習するからこそ、3学期に開催する福祉の集いは、高齢者だけでなく、地域の住民全体に向けて招待状を送っても面白いと思いました。学校からの依頼に高齢者とあったため、中心となるのは高齢者かもしれません。しかし、地域に住むのは高齢者と子供たちだけではないため、「地域に住むどんな人でも楽しめる企画とは何だろう？」と考えていくことも大切ではないかと思いました。

小林ゼミ学生

他の参加者(社協)より

社協職員①

こども民生委員として、地域の高齢者宅へ訪問の聞き取り調査をしている活動がとても素敵だと思いました。聞き取りだけで終わらず、イベントにつなげていくのも魅力的です！



社協職員②

今年度、夏のちょボラ学校にご一緒した際、参加者の皆さんと職員、団体の方々が楽しそうに交流される姿が素晴らしいと思いました。合わせて、地域の中で年間を通して小学生が高齢者と関わるプログラムで、「地域から包まれている感覚の体験」という表現でねらいを記載されていて、素晴らしいと思いました。

識者よりひと言



福祉教育において学習者が「生活の場」に出かけていくことは、学校に授業者が来校するのとはまた違う意味がある。民生委員という地域のキーパーソンの協力も得ながらの小学校6年生向けの本実践は3年生から5年生までの積み上げの「まとめ」として位置づけているところも授業実践者の思いを感じることができるポイント!!

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

体験を通じた学び



(手話の体験)



(高齢者疑似体験)

実施日	場所
令和6年10月24日(木) 45分×2 講	南丹市立胡麻郷小学校
参加者	依頼先
小学5年生 児童22名 (1学年)	明治国際医療大学付属病院 総合リハビリテーションセンター(理学療法士)、ふない聴覚言語障害センター(聴覚障がい者、手話通訳士)、手話ボランティアグループはんどhand

内容
児童を2グループに分け、2プログラムを交代で実施した。 【プログラム①聴覚障害・手話について学ぶ】 聴覚障がい者・手話ボランティアグループへ社協が質問する形式で進行(通訳士の方が通訳)。挨拶の手話体験、事前に小学生から集めた質問項目への回答、ボランティアグループの紹介。 【プログラム②加齢による体の変化について学ぶ】 加齢による体の変化について説明。ベアになって高齢者疑似体験セットを用いた体験・介助。

ねらい・目的
<ul style="list-style-type: none"> ・体験を通して、同じ町に暮らす障がいをお持ちの方や高齢者の方の暮らしを想像する機会とする。 ・自分には何ができるかを考える。 ・今後学習を深めていきたい福祉のトピックを見つける機会とする。

実施後の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ・同じ町に住む聴覚障害をお持ちの方を意識するきっかけとなった。手話を体験し、親しみを持つ機会となった。 ・高齢者の方と自分の普段の暮らし・動作の違いや同じ部分を知るきっかけになった。 ・体験は「楽しい」ことが先行し、学びが十分だったのか？協力者が疑問を感じていた。協力者が子どもたちが学んでいる様子を実感しにくかった。 ・福祉教育をきっかけに、リハビリテーションセンターとのつながりができた。

「福祉教育ワークショップ」講師の視点

手話や年齢による変化について学んだことは、子供たちにとっても貴重な経験になったように思います。人数のことなので仕方ないところもあると思うがそれぞれのプログラム自体が興味深いと思われるので、同じ空間でプログラムが行えたとしたら、さらにもっと深い学びを提供できると思うと同時により一層互いの学び場へと進化していくのではないかと思います。



メインストリーム協会 鍛冶 克哉

他の参加者(社協)より

社協職員①

他者の暮らしを想像する、ということは、簡単なようで実は身近な自分の家族でもなかなか難しいことであると思います。想像を通して、他者への関心、思いやりの意識を広げていきたいですね。



社協職員②

プログラム体験をとおして、福祉に対して興味や関心をもってもらう他に、相手の気持ちに寄り添いながら当事者の方とつながりの関係を構築することができるのでとても学びにつながると思いました。



識者よりひと言



高齢者と聴覚障害に関する学びを二本立てで実施されたプログラム。地域の関係者に協力を得ながら実施されているため、関係も深まり、深掘りにも対応することができる。学びの深まりという点でいえば、この二本立て企画の共通点を学習者が探し出し、関連づけていくことでもっと面白くなる可能性を感じる！

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

高齢になることで起きる変化～自分たちに何ができるか～



(介護施設で働く職員による授業)



(ほほえみ八木通所介護事業所見学・交流)

実施日	場所
令和6年10月18日(金)～11月19日(火)(4日間)	園部第二小学校、ほほえみ八木通所介護事業所、こむぎ山デイサービスセンター
参加者	依頼先
小学4年生児童42名(2クラス)	ほほえみ八木通所介護事業所、こむぎ山デイサービスセンター

内容
<p><1日目> 介護施設で働く職員による授業。～高齢になることでの心身の変化。職員はどんなことに気を付け仕事をしているのか?～</p> <p><2日目> 認知症サポーター養成講座～認知症って?こんなときはどう対応したらいい?～</p> <p><3日目> ほほえみ八木通所介護事業所への見学、交流～1日目・2日目の学びの実践、レクリエーション参加～</p> <p><4日目> こむぎ山デイサービスセンターへの見学、交流～1日目・2日目の学びの実践、レクリエーション参加～1日目、2日目は学年全体での授業。3日目、4日目はクラスで分かれて参加。</p>

ねらい・目的
<ul style="list-style-type: none"> ・地域と一緒に住む高齢者はどんなことに困っているだろうか、自分たちには何ができるかを考える。 ・高齢になることで起きる心や身体、脳の変化について知る。 ・こんなシチュエーションの時はどんな風に対応した方がいいのか?を考える。 ・高齢者と日々関わっている職員がどのようなことに気を付けているかを学ぶ。

実施後の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ・2日間の学習で学んだ「高齢者と関わる時に気を付けること」を見学・交流する際に実践することができた。 ・子どもたちにとっての「高齢者」のイメージがポジティブになった。 ・利用者にとっても貴重な子どもとの交流の機会となった。 ・今後子どもたちで交流内容を考えてはどうか? ・施設に時間や場所を合わせるため、子どもたちの集中が続かないところがあった。

「福祉教育ワークショップ」参加者の声

高齢者に焦点を当て、施設を巻き込み福祉教育を展開している点が素敵だと感じました。そして、福祉施設の職員の方から話を聞くことは当事者とは違う視点から学びを深められると思います。通所介護での実践を通して、「高齢者」へのイメージがポジティブになったと書かれており、継続して実践していくべきものだと考えました。高齢者の分野で福祉教育を行うならば、高齢者体験キットのようなものを使い実際に体の重さや、目の見えにくさなどを子供たちに体感してもらっても楽しいのではないかと思います。

小林ゼミ学生

他の参加者(社協)より

社協職員①

子供たちにとっての「高齢者」のイメージがポジティブになったというのはとても素敵ですね。また高齢者の方にとっても交流を通して元気になってもらえる相互作用がとてもいいと思います。



社協職員②

4日間のプログラム体験から高齢者について様々な視点から考えることができ、施設の利用者や子供たちお互いにとって貴重な体験の場になっていると思いました。



識者よりひと言



今日、小学生にとって自分の祖父母以外の高齢者に触れる機会はそれほど多くないだろう。小学生が高齢者に抱くイメージも固定化する可能性もあるなかで、複数回にわたり多様な学びが組み込まれた興味深いプログラム。関わった人たち(高齢者、子どもたち、施設職員、先生)それぞれの感想を聞いてみたい!

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

どうしたら伝わる?色んなコミュニケーションの方法を学ぼう!



(1日目) 点字学習



(1日目) 手話学習



(2日目) 地域の方との交流

実施日	令和6年9月19日(木)(1日目) 令和6年11月6日(水)(2日目)	場所	南丹市立 園部小学校
参加者	小学4年生児童88名(3クラス)	依頼先	ふない聴覚言語障害センター/点字サークル 楽点/南丹地域包括支援センター/視覚障がい者/ 聴覚障がい者/地域の方

内容
<p>事前学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社協職員によるビデオレターを作成。南丹市内のボランティア、障害のある当事者団体の活動を紹介した。 <p>1日目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障がい理解(点字学習)・聴覚障がい理解(手話学習)・高齢者理解(レクリエーション)の授業。 ・3クラスの児童がクラスごとに教室を移動し、1時間ごとに講師から学んだ。 <p>〈講師〉視覚障がい理解(点字学習)…点字サークル「楽点」の皆さん 聴覚障がい理解(手話)…ふない聴覚言語障害センター、当事者 高齢者理解(レクリエーション)…南丹地域包括支援センター</p> <p>2日目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1日目の授業終了後から2日目までの2ヶ月弱の間に、児童それぞれが、3つの中から特に学びを深めたい学習を決め、2日目に向けて児童がプログラムを考えた。 ・児童が考えたプログラムに沿って、当事者、地域の方との交流をした。 <p>〈内容〉視覚障がい理解…点字あてゲーム、お題から答えをあてるゲーム等 聴覚障がい理解…ジェスチャーゲーム、手話リレー等 高齢者理解…風船バレー、伝言ゲーム等</p>

ねらい・目的
<p>〈児童〉 様々な障害がある人や高齢者の思いを学んで交流し、自分たちのできることを考える。</p> <p>〈授業者〉 障害のある人や高齢者の気持ちや生活の工夫を伝え、ステレオタイプのイメージを取り払う。自分たちのできることに気づきを促す。</p>

実施後の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ・点字、手話、高齢者の特性など具体的に学ぶことができた。 ・当事者と交流することで、それぞれの違いや思いを感じることができた。 ・2日目の交流プログラムを考える過程で、どうすれば一緒に楽しむことができるか?と問いをめぐらし、自分ではない他者の思い想像することができた。

「福祉教育ワークショップ」参加者の声

当事者さんから生の声を聞くとともに、子どもたちが主体的に当事者さんと一緒に楽しく遊ぶためのプログラムを考えることで、「外部講師」としてではなく「一緒に楽しんでくれる大人」として、より深い関わりを感じられる良い企画だと思いました。一緒に楽しむプログラムを実行してみて、障害者や高齢者が意外と元気でできることも多く、自分たちには無い力を持っている!と気付いた子どももいるかと思えます。相互関係の中で得ることができたその気付きは、これからの福祉教育をより良く深めることのできる視点だと感じます。

小林ゼミ学生

他の参加者(社協)より

社協職員①

2日間の体験の間に、2カ月弱の期間を設けることで、学びを継続できる点が良いと思いました。また、1日目の体験を受けて、児童自身が作成したプログラムを当事者、地域の方と実施することで、世代間の会話・交流を自然に生み出す仕組みがあると感じました。

社協職員②

1日目の学び後に、児童自身が何を学びたいのかを選び、自らプログラムを展開していくことで、児童の主体性を高めてより理解が深まると感じました。また協力団体にとっても自分たちの発信が、これらのような児童の行動として形になったということは、発信への自信にもつながるのかなと感じました。

識者よりひと言



タイトルにある「伝える」ということは福祉教育にとってとても大切なキーワード。複数回にわたるプログラムの時間を確保することは非常に難しいことかもしれないが、こどもたちがインプットとアウトプットを経験することは「伝える」ということにおいてとても大切!!

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

オレンジやわた(談話「情報発信」)



今年度のポイントは「当事者」「対話」「大学生と」



対話を通じて気づきを深めました。



啓発展示に花畑登場。ふと立ち寄るきっかけに



ロールプレイのシナリオも、事例を基に考えました。



オレンジのセロハンを貼付け



認知症カフェで交流をしました



様々な場でフラワーづくりを依頼

実施日	場 所
通年	福祉会館、市役所、オレンジカフェ会場など
参加者	依頼先
摂南大学生、一般市民	大学、地域包括支援センター

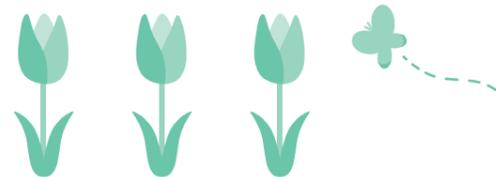
内容
<p>八幡市と八幡市社協では、認知症の人にとっても住みやすい地域づくりに向け認知症理解の啓発に取り組んでおり、令和6年度は摂南大学生や地域包括支援センターとともに認知症啓発の取組を実施している</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> オレンジやわたミーティング ゲストスピーカー（認知症当事者・支援者）の話や「自分と認知症」についての意見交換、企画検討 <input checked="" type="checkbox"/> イベントの実施 オレンジライトアップ…さくらであい館を認知症啓発シンボルカラーのオレンジ色にライトアップ オレンジフラワー大作戦・展示…市民にオレンジフラワーを作っていただき、お花畑を完成させる。 花畑は、認知症啓発パネルと併せて展示。 カフェ「オレンジやわた」…認知症講座及びカフェをロールプレイ、〇×クイズを交えて実施。 <input checked="" type="checkbox"/> オレンジトーク会 ①当事者②家族③地域で見守る方へのインタビュー及びグループインタビュー <input checked="" type="checkbox"/> 冊子づくり オレンジトーク会を基に、認知症当事者の想いを冊子にまとめ、啓発を行う

ねらい・目的
<p>認知症に関する医学的な知識や福祉・介護サービス等について知るだけでなく、認知症のご本人や認知症に関わる人たちの想いを発信することで認知症の理解を深めていく。</p>

実施後の成果と課題
<p>【成果】 フラワーづくりに参加した方が展示にも来訪され、「私も関わった」という動機付けにつながった。</p> <p>【課題】 インプット(対話・交流)とアウトプット(発信、行動)の環境の工夫</p>

「福祉教育ワークショップ」講師の視点

『対話』が大事にされていることはとても良いことだと感じました。ただその一方で、当事者の方を交えた『対話』でないと、当事者の方がいわゆるなにを求めている、どのようなところを支援して欲しい、または助けて欲しいのかというところを健常者側が都合の良いように解釈してしまう危険性もあるのではないかと感じました。



メインストリーム協会 鍛冶 克哉

他の参加者(社協)より

社協職員①

イベントを通じて、入り口の「楽しい」⇒「なぜ」⇒「何のために」⇒「学び深める」⇒「振り返る」をパッケージとしたプログラム。インタビューなど自分から「聴く」ことで、参加者の主体的な行動変容へつながるきっかけになることに期待したい。

社協職員②

「大学生と」ともに活動に取り組んでいるということがいいなと感じます。また、認知症当事者の想いを冊子にまとめるということで、その場だけに留まらず、その後の啓発活動にも繋がられているという点もとても参考になりました。

識者よりひと言



認知症について知る機会を憩いの空間で、しかも関わりの角度を変えながら開催したのはとても刺激的！大学生を巻き込み、成果を冊子としてまとめる丁寧な取り組み。認知症のみならず、さまざまなテーマで開催することができる印象があるので別テーマで第2弾3弾と取り組むと大変おもしろい！！

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

令和6年度サマスク! (SUMMER SCHOOL) ~楽しくふくし&ボランティア体験~



実施日 令和6年7月30日(火)・31日(水) 10:00~15:15	場所 福知山市総合福祉会館 及び 市民交流プラザふくちやま市民交流活動室
参加者 福知山市内在住の 中学生・高校生とその世代のべ15名	依頼先 市内ボランティア団体、サロン、障害者スポーツ指導員、 福知山民間社会福祉施設連絡協議会等

内容 (1日目) ①ボランティア活動の話・点字で名刺づくり ②介護・レクリエーション活動の話と体験 ③介護食試食・とろみ体験 ④ボッチャ&卓球バレーの話と体験 ⑤ふれあいいきいきサロン活動の話と交流 ⑥サロン実践に向けてグループワーク (2日目) ⑦学生ボランティア団体の活動の話・交流・スタンドグラス風しおり作り ⑧学生ボランティア団体とサロン企画会議・準備 ⑨就労継続支援事業所の話と昼食 ⑩サロン実施 ⑪リフレクション

ねらい・目的 (1) 中学生、高校生とその世代に、福祉やボランティア活動に携わるきっかけづくりを行う。 (2) 福祉学習やボランティア体験を通して、福祉やボランティアに関する知識を得るとともに、参加者同士、福祉活動を行う方々、福祉専門職等との交流をとおして、楽しさやつながり支え合うことの大切さを実感する機会とする。 (3) 参加者自身がつながりづくりのアイデアを考えたり共有したりする体験をとおして、主体的に地域福祉活動実践に関わる機会とする。

実施後の成果と課題 〈成果〉 ・各プログラムの体験や交流、その後のグループワークやリフレクションを通じて、参加者は福祉やボランティア活動について、お互いに気づきや学びを共有し合うことができた。 ・多機関が協同して福祉学習プログラムを実施できた。 〈課題〉 ・2日間で多様なプログラムを組んだが、次回以降は団体や当事者の方、参加者同士の交流を深め、学びを掘り下げる時間や機会もつくっていききたい。 ・福祉学習の取組みを学校や家庭にさらに周知するとともに、昼食無料等、生活に不安のある家庭のお子さんも参加しやすくなる工夫が必要である。 ・介護体験も重要であるため、例えば、食事介助等の内容も取り入れていきたい。

「福祉教育ワークショップ」参加者の声

1日目に自分たちで介護食を食べたり、レクリエーション活動を行い、二日目にサロンの実践を行うことで、当事者の立場に立って考える、生活を知ることができるので、とても良いプランだと感じた。課題にも書いてあるが、できる・できないは置いておいて、企画の段階から学生さんの意見を取り入れたり、対象の年代を広げてみても新たな学びがありそうだと感じた。

小林ゼミ学生



他の参加者(社協)より

社協職員①

福祉を広く体感する内容。すべてがコミュニケーションを介して学ぶ内容となっており、福祉は「人」であることの「力」を身に付けるプログラムとなっている。社協が多様な社会資源との連携が活かされ、若い世代が、福祉に溶け込める内容だと思います。介護食の体験は斬新。興味から福祉へひきつけるところがいいですね。

社協職員②

介護職の試食など。「食」を通して福祉に触れるという視点は、参加者側にとってとても良いタッチポイントになるということを感じさせられました。また、インプットだけでなくアウトプットもセットでできる場を作ることも、参考にさせていただきたいと思います。

識者よりひと言



実際に拝見させていただきました。高齢者施設における手作りの「レクリエーション」を楽しむという機会と介護食という日頃親しみのない、しかし人にとって重要な「食」を題材にしているところが面白い！講師の施設職員の方のトーク力もGood!!

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

防災運動会



実施日	場所
令和6年6月29日(土)	バンビオメインホール
参加者	依頼先
3歳～92歳 150名	

内容
<p>13:00 受付開始／5チームに分かれる 13:35 開会式(挨拶、来賓紹介、準備体操) 13:55～14:15 ○×クイズ 14:20～14:30 地震が来たぞ86.2MHzを探せ！～クマが出た！FMおとくにバージョン～ 14:35～14:55 大雨だ、早く土のうを積み上げろ！～一輪車リレー～ 15:00～15:20 溺れている人を救助するぞ！～衣類でつくろう救助ロープ～ 15:25～15:45 困っている人を避難所誘導できるかな？～視覚障がい者誘導・車いすリレー～ 15:50～16:00 助け上手、助けられ上手になろう！ 16:00 閉会式</p>

ねらい・目的
<ul style="list-style-type: none"> ・災害を切り口に福祉を学ぶ ・頭と身体を動かし楽しく学ぶ ・無関心層に少しの関心をもってもらう

実施後の成果と課題
<p>成果 定員100名の予定が4日で定員オーバーになった。思いのほか参加しやすい取り組みであった。市内自主防災会の研修で取り入れられた。市内運動会の競技にとりいれられた。</p> <p>課題 室内での限界を感じた。参加者を追える仕組みで実施できていないので一方通行の取り組みになった。</p>

「福祉教育ワークショップ」参加者の声

150名もの方が楽しく災害や福祉について考えることができた、素敵な企画だと思いました。防災という興味を持ちやすいテーマで大人と子どもが共に遊び学ぶことで、皆さんの心に残る運動会になったことと思います。私が特に印象に残ったプログラムが「助け上手、助けられ上手になろう！」です。「助けて！」と言える力や環境が求められる場合は、災害時だけではなく、災害という助けを求めてもいい雰囲気強い環境から始まり、学校や職場といった日常生活の場へ、受援力を活かす力を広げていくことも必要だと感じました。

小林ゼミ学生

他の参加者(社協)より

社協職員①

100名を超える方々が参加されたということで、その規模の取り組みをされているというシンプルに素晴らしいなと思います。また、それぞれが持ち帰り、他の場面でも取り入れられたということは、それぞれその価値や大切さが届いたことの現れかと思っています。

社協職員②

「困っている人へ避難所誘導」の種目を通して、参加者に対し、ふだんの暮らしの中に、このような人がいるという意識につなげることができていると思いました。また、福祉教育を進める中で、自分が誰かのために何ができるかというアプローチをすることが多いが、「助けられ上手になる」を視点も大事にしたいと思いました。

識者よりひと言



防災というテーマは地域において多様な年齢、属性を持つ住民にとって繋がれる重要な関心事！多くの参加者があったのも納得！次なる展開が楽しみであると同時に参加者がどのような感想をもったのか聞いてみたい！

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

夏休みデイサービスボランティアウイーク



実施日	場所
夏休み期間の内、一週間	南山城村デイサービスセンター
参加者	依頼先
小学生～大人までどなたでも	南山城村デイサービスセンター

内容
9:00 デイサービスセンター 集合 9:10 説明 9:30 デイサービス利用者 受け入れ 10:00 健康チェック・入浴準備 10:15 入浴・会話 11:30 食事前レクリエーション 12:00 昼食準備 12:30 休憩 14:00 レクリエーション 15:00 休憩・健康チェック 16:00 デイサービス利用者 見送り・ふりかえり

ねらい・目的
<ul style="list-style-type: none"> ・福祉に関心を持ってもらうため ・介護や福祉、デイサービスについて知ってもらうため ・子どもから高齢者までの世代間交流の機会の確保 ・自分の地域に住む高齢者との出会いの場

実施後の成果と課題
<ul style="list-style-type: none"> ・参加者に応じて、体験の時間を変更している。(休憩時間を多めに設定したり、半日のプログラムに変更している。) ・ふりかえりシートを作成し、一人ひとりと話をしながら体験後のふりかえりをすることが出来た。 ・チラシを全戸配布、小中学校で配布しており、年々参加者は増加傾向であるが、まだまだ少ないので多くの人に参加してもらいたい。 ・複数の参加者より「来年も参加したい」との声を聞かせてもらうことが出来た。

「福祉教育ワークショップ」参加者の声

対象年齢を区切らないことで、様々な年代の方たちと繋がれる機会になつていると感じた。また、1日で終わることが多い中、1週間という長い期間関わる時間を持つことで、体験が終わってからも繋がりをより持ち続けられるのではと感じた。

小林ゼミ学生



他の参加者(社協)より

社協職員①

参加だけでなく、ふりかえりシートを用いて一人ひとりと対話するところがとてもいいなと感じました。幅だけでなく深さに意識を向けることも大切にしていきたいなと思います。



社協職員②

「小学生から大人までどなたでも」対象とされ、全世代の学びの機会につながっていると感じます。また、参加者に合わせて時間を変更する工夫や、一人ひとりとお話をしながら体験後のふりかえりも行う更に学びが深化する機会をつくっていただける点も見習いたいと思いました。

識者より一言



デイサービスは、いまや地域に非常にたくさんある施設。でもそこにお邪魔し、利用されている方々の日常や施設の雰囲気を感じる機会は少ない。他世代にとっても関わりを持つようになってから初めて知る高齢者施設で学ぶことは学習者の大きな学びになる!!

日本福祉大学社会福祉学部 准教授 小林洋司

本アイデアブックに作成にご協力いただいたみなさま

『福祉×教育アイデアブック』の作成にあたり、
ご協力を賜りました多くの方々に心より感謝申し上げます。
現場での実践や貴重なご意見、あたたかなお力添えがあってこそ、
本書を形にすることができました。
ご協力いただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

(敬称略)

講師 / 日本福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科 准教授 小林 洋司

講師 / メインストリーム協会 鍛冶 克哉

日本福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科 勝又 史織

日本福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科 辻 桜香

日本福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科 羽根田 那音

福知山市社会福祉協議会

綾部市社会福祉協議会

あやべボランティア総合センター

宇治市社会福祉協議会

長岡京市社会福祉協議会

八幡市社会福祉協議会

京田辺市社会福祉協議会

南丹市社会福祉協議会

南山城村社会福祉協議会



社会福祉法人
京都府社会福祉協議会

福祉教育プログラムについて

発行日：令和7年3月

発行所：社会福祉法人 京都府社会福祉協議会

住所：〒604-0874

京都市中京区竹屋町通烏丸東入る清水町 375 ハートピア京都 5F

電話：075-252-6294

<https://www.kyoshakyo.or.jp/>

KFS21MA-18



本冊子は、赤い羽根共同募金の助成を活用して作成しています。

赤い羽根共同募金

